



①毛捌き機にかけられ、水洗いし柔らかさや色味によって分類され均等な長さに切り揃えられた棕櫚。②巻き上げ機にセットする前の束ねられた棕櫚。③巻き上げ機にセットされた針金の間に繊維を挟んでいく。美しい仕上がりのためにムラ無く並べる。④ハンドルを絶妙な力加減で巻き上げていく。強く巻けば繊維を切ってしまうし、緩ければ抜け落ちる。⑤巻き終えたら手で触って確認する。⑥最後に丸めて見慣れた形の束子となる。



紀州産の棕櫚は中国産に比べると赤味がある。自然のものなので色には個体差はあるが、繊維は細くしなやかでコシがある。

the Creator's heart



「目で見て、手で触れて棕櫚の巻き加減を調整します。繊細な作業なので機械任せにはできません」と語る高田英生さん。

高田耕造商店
住所 / 海南市樟木97-2 電話 / 073-487-1264

見ただけで普通の束子との違いがわかる。触ってみると、コシがあるのに優しい肌触りに驚く。長い柄のこの束子は、身体を洗うのにぴったりな形状。値段は高いが一度使えば、手放せなくなる心地よさ。



使うほどに柔らかくなるのだとか。自然の物の優しさが感じられますね。



用途によって形が様々な束子。有古さんも野菜用や身体用の束子を購入した。



手の指の感触で、分量をはかったり、機械をまわしたり。まさしく職人技ですね！

巻き上げの工程を体験する有古玉青さん。純国産の棕櫚束子は希少価値がゆえ、ひとつ2万円するものもある。

棕櫚束子（しゆるたわし）

純紀州産を復活させた職人の意気

弘法大師空海が唐より持ち帰ったとも伝わる紀州の棕櫚。その樹皮は水を弾きやすく丈夫で、古くから縄や束子などに使われてきた。なかでも紀北の「野上谷」と呼ばれる地域で多く栽培され、良質な紀州の棕櫚束子は日本中で重宝されてきた。しかし時代の移り変わりと共に、安価な化学繊維や外国製のパームヤシに押され、昭和30年頃から徐々に姿を消していったという。

「私たちがこうして素材で製造していましたが、日本の産地・和歌山でありながら棕櫚を使わないのはおかしい。なんとか昔ながらの束子を復活させたい。という職人の意気から挑戦を始めたのですが、これが大変でした」と語る高田英生さん。長年放置されていた棕櫚からは思うよう



な肌触りの樹皮が収穫できなかった。わずかに残る地元の棕櫚皮職人たちにも協力をあおぎ、棕櫚山を再生することから始め、5年程の歳月をかけて少しずつ棕櫚を安定して確保できるようになってきた。

「昔ながらの棕櫚束子って素敵ですね。優しい触り心地なのにしっかりとコシもありますね」と有古さんもその感触に驚きを隠せない。使う人にも環境にも優しく、日本人が愛用してきたその価値を伝えたい。これが野上谷に生まれた職人としての使命です」。

高田耕造商店の束子は、手仕事で作られる。繊細な繊維の棕櫚だからこそ機械任せにはできない。まさに職人達の手間の結晶である。

幹を抱くように巻いている樹皮を、剥くための刃物。熟練された職人が一枚一枚丁寧に採取する。1本の木から1年に僅か10枚程しか採れないという。

特徴的な形状の和棕櫚の葉柄。束子などの原料には葉ではなく樹皮を利用する。

まるで編まれた生地のように、繊維が絡み合っている棕櫚皮。

